

第 2 回及び第 3 回資源管理手法検討部会の結果について（案）

令和 4 年 2 月
水産政策審議会
資源管理分科会
資源管理手法検討部会

1 第 2 回資源管理手法検討部会の結果

令和 3 年 11 月 29 日（月）に開催された部会で整理された論点及び意見は次のとおり。

(1) カタクチイワシ太平洋系群

● 漁獲等報告の収集について

- 現場に過度な負担がかからない体制の構築や所属漁協以外の水揚げへの対応を検討する必要がある。
- 系群の対象範囲を明確にすべき。
- 他のイワシ類との「混じり」で報告される場合があるのか。その場合の漁獲量の集計方法はどのようなのか。
- かつお一本釣り漁船に活餌として供給する活魚の漁獲量の迅速かつ正確な把握が困難。
- 漁業者・団体等が管理の検討に当たって必要なデータを適切に公表すべき。

● 資源評価について

- 資源評価の実施においては、引き続き共同実施機関や外部有識者とともに、科学的な検討を十分に行い、その時点での利用可能な最善の科学情報に基づく結果を示すように努めることが必要。
- 都道府県ごとの漁獲量だけでは、国内全体の資源水準を把握することが困難ではないか。
- レジームシフト・魚種交代など資源状況の変動に関する情報を踏まえた資源評価を検討すべき。
- 限界管理基準値以下に資源がある場合の再生産関係をよく検討すべきではないか。
- 資源管理と切り離して、漁業者や地域視点を含めた資源評価単独での意見交換の場の設置を検討すべき。

● 資源管理について

- 漁獲シナリオの検討においては、3～5年程度の短期目標も提示すべき。
- T A C 管理の導入には慎重を期すべき。
- 数量管理以外の手法（漁業実態や地域で行っている努力を考慮する等、効果的な管理手法）を検討すべき。
- シラス漁業や沿岸定置網での混獲、狙って漁獲しない操業実態に対して、十分な配慮が必要。
- T A C 管理を導入する場合でも、カタクチイワシとシラスを区別することや、段階的な管理の実施、都道府県を跨がる共同管理や複数年 T A C などを検討すべきではないか。また、漁獲の偏りが生じた場合に公平かつ速やかな T A C 配分を行う等、柔軟な仕組みづくりが必要。T A C 制限による補償も検討すべき。
- 資源状況について予期せぬ事態が起こった場合、漁業経営に大きな影響を与えないよう、漁獲シナリオの変更を含めて、速やかに管理を見直す必要がある。
- シラスについて、カタクチイワシ（成魚）との関係で管理上、どのような扱いとすべきか、どのような手当てをすべきかを、整理する必要がある。

● S H 会合で特に説明すべき重要事項について

- 餌資源として利用している漁業者や水産加工業者も含めた関係者に対する丁寧な説明及び意

見聴取が必要。

- 単価変動や市場、流通・加工の観点を取り入れた説明が必要。カタクチイワシがどのようなニーズで獲られて、どのような用途とされているか、その経済的効果についても整理が必要。
- 既存のTAC魚種と比較した水準や問題点等、環境の影響と人為的な管理効果を対比した説明が必要。

(2) ウルメイワシ太平洋系群

● 漁獲等報告の収集について

- 現場に過度な負担がかからない体制の構築や所属漁協以外の水揚げへの対応を検討する必要がある。
- 漁獲報告の収集範囲の拡大、資源特性値を含めた知見の収集が必要。
- 他のイワシ類との「混じり」で報告される場合があるのか。その場合の漁獲量の集計方法はどうか。
- 漁業者・団体等が管理の検討に当たって必要なデータを適切に公表すべき。

● 資源評価について

- 変動が大きい資源であり、資源評価の精度・信頼性に疑問がある。
- 環境変化や漁場の北上の影響を配慮した資源評価が必要。

● 資源管理について

- 資源量が最低水準になる前に、漁獲規制などの資源管理措置が必要。
- TAC管理の導入には慎重を期すべき。
- 混獲が主体であり、もともと狙っている魚種の操業が制限されてしまうことを懸念。
- 定置網での混獲等、狙って漁獲しない操業実態に対して、十分な配慮が必要。
- TAC管理を導入する場合でも、漁獲量の年変動や地域間の差異が大きいことから、試験的に実施することを含めて段階的に進める、配分量の融通や留保を活用するなどの、柔軟な管理制度が必要。
- 漁業経営に影響を与えるような急激な漁獲量の規制が生じないように検討すべき。

● SH会合で特に説明すべき重要事項について

- 既存のTAC魚種と比較した水準や問題点等、温暖化による水温上昇などを含む環境の影響と人為的な管理効果を対比した説明が必要。
- 今後の資源動向に関する予想や、効果的な資源管理方法を提言して欲しい。

2 第3回資源管理手法検討部会の結果

令和3年12月14日（火）に開催された部会で整理された論点及び意見は次のとおり。

(1) カタクチイワシ対馬暖流系群

● 漁獲等報告の収集について

- 定置網はほぼ全量魚市場へ出荷、船曳網は漁協の共販であることから、漁獲量データの精度は既に高い。
- 魚探等による判別や正確且つ簡便な選別、計量等のための技術開発が必要。
- 資源評価側においても、現場の漁獲実態を正確に把握できるよう、今以上に高頻度での十分な調査を行うべき。
- 漁獲した後にすぐに加工作るという特性を考慮して、現場での漁獲量の収集体制を構築する必要がある。
- 活餌として販売するものについては漁獲時の漁獲量計数が困難。
- 混獲状況も含む水揚げデータを、市場、漁業者、組合、(一社)漁業情報サービスセンターが一元的に管理、運用するシステムが必要。

● 資源評価について

- 操業実態（加工現場や流通状況、来遊に応じた漁獲等）を踏まえ、漁獲量のみで資源状況を判断すべきではない。
- 規制によらない（後継者不足や高齢化）漁獲量の減少も想定した資源動向を予測した上で、検討願う。
- T A Cはカタクチイワシとシラスで分けて管理されるのか。0歳魚の獲り控えは、シラス漁も制限する予定か。
- 資源評価に用いたデータを明示するとともに、情報量をよく精査すべき。また評価や調査の拡充を行うべきでは。
- 韓国や中国の同魚種の漁獲データを除外して資源評価されているため、精度や信頼性に懸念。

● 資源管理について

- 資源量の変動が激しいため、漁業者が信頼できる目標を設定してほしい。また、目標を柔軟に見直しできるか。
- 親魚量と加入量に相関関係がみられ、親魚の漁獲管理に基づく資源管理を行う前提条件が整っている。
- 仮にT A C管理を導入した場合は、管理を始めた最初の時期に、急に漁獲が減らないようにしてほしい。
- 数量の融通や留保枠の再配分などが迅速にできる枠組み等、柔軟な運用策の準備が必要。
- T A C管理に係る過去の成功例や失敗例を参考にして資源管理を進めるように努めてほしい。

● S H会合で特に説明すべき重要事項について

- 「資源」だけでなく「漁業経営」も念頭に入れて議論すべき。
- 韓国・中国との共通資源のため、周辺国の漁獲量の正確な把握等の考慮、国際的な資源管理体制の構築。
- 複数のシナリオがあるが、どのような違いが生じるか分からないため、漁業者等は選択できないのでは。
- 先行して導入実施した魚種の問題点や課題を検証し、解決策を検討したうえで行うべき。
- 他魚種の漁獲状況や価格相場などによって漁獲圧が大きく変化するため、先行T A C魚種と同様の管理は困難。
- 魚探の精度向上(おおよその魚種判別)による回避、放流技術の開発や休漁補償等の影響緩和

策と合わせて慎重に議論する必要あり。

(2) ウルメイワシ対馬暖流系群

● 漁獲等報告の収集について

- 混獲や自社加工、市場を通さない直接取引があり、正確な漁獲量の把握が困難。正確な計量には漁業者や市場関係者等の負担が大きい。デジタル化による情報収集体制の構築や技術開発等も必要ではないか。
- 県内の情報共有や漁獲報告体制が未整備である。市場、漁業者、漁協、(一社)漁業情報サービスセンターが一元的に管理、運用するシステムが必要。また、資源評価の精度向上のため、CPU Eの把握等さらなる調査が必要。

● 資源評価について

- 資源評価のデータセットや地域別の漁獲量、操業形態を示しながら、資源評価の信頼性、不確実性、外国漁船の操業による影響をわかりやすく説明すべき。
- クロマグロ、サバ類、マイワシ、マアジ等の既存TAC魚種と比較した資源評価の精度、信頼性の説明が必要。
- 資源増大後の販売や流通についても検討が必要。
- イワシ類の資源量の変化により、他魚種の資源量にどのように影響するのか教えていただきたい。

● 資源管理について

- TAC管理以外の管理手法についても説明して欲しい。
- クロマグロのように現場が混乱することがないように慎重に検討してほしい。
- 主漁獲対象魚種の操業に影響が出ないように、毎年一定水準以上のTACが担保されるシナリオや初めは緩やかな管理とし、回復してきたら徐々に強めるようなシナリオ等、漁業現場の意見を取り入れた漁獲シナリオとすべき。
- 各海域での30年間の漁獲実績及び漁獲努力量の推移を考慮すべき。
- 漁獲量の年変動や地域間の差異が大きいことを考慮した柔軟な管理制度が必要。また、配分量の融通や留保の再配分が迅速にできるなどの枠組みが必要。
- TAC導入については、資源評価の精度、信頼性、漁獲特性、TACの運用方法等に課題があり、様々な議論を深め、現場への丁寧な説明を求める。現時点では議論が尽くされていないと認識している。
- 気候変動等による資源の増減に合わせて、資源管理目標の柔軟な見直しができるようにすべき。

● SH会合で特に説明すべき重要事項について

- 意図しない混獲により、操業停止とならないように国の留保を設定し、迅速な追加配分等柔軟な運用をして欲しい。
- シラスを資源評価及び資源管理に考慮するべきか。シラス資源管理実施の有無を説明願う。
- 現状、中国・韓国の漁獲量が考慮されていない資源評価の精度・信頼性に懸念。資源評価の精度向上のため、外国漁獲量の把握や調査の拡充を行うべき。

(以上)